

湯浅茂雄先生とのお仕事はいつも楽しく

国文学科主任 福 嶋 健 伸

湯浅茂雄先生が、今年度末をもって大学を去られる。ご退職の理由はご定年ではなく、実践女子学園中学校高等学校の校長職に就かれたためである。

湯浅先生は、一九九八年四月に本学国文学科に教授として着任、その後、二〇〇一年には学科主任、二〇〇三年には文学部長を歴任し、二〇〇七年には、本学の学長に選ばれ、渋谷キャンパス移転という大きな仕事をなさった。さらに、今回の校長職である。要職が湯浅先生をはなさないといえる。

ご定年によるご退職であれば来年度末のご退職となるので、我々は、一年はやく湯浅先生とお別れすることになる。この点、何とも寂しい。しかし、併設校の校長職であれば、今後実践女子学園内でお目にかかることができるので、

その意味では心強くもある。

人を惹きつけてやまない湯浅先生のお人柄は、改めて述べるまでもないだろう。先に「要職が湯浅先生をはなさない」と書いたが、これも、多くの人の期待に、湯浅先生が応えているということだと思う。

湯浅先生と一緒に取り組むお仕事は、それが厳しいものであっても、なぜか楽しい。例えば、二〇〇四年に、実践女子大学で第一回目の日本語学会（旧称・国語学会）が開催された時、私は本学科の助手として、開催準備のお手伝いをさせて頂いた。湯浅先生をはじめ、土井光祐先生や山内博之先生と共に準備を進めたのだが、その作業は難航し、全員、かなり過酷な状況ではあった。しかし、なぜか、毎日がお祭りのようであって、不思議と楽しいのである。ま

た、学会開催後の打ち上げも、よく分からない盛り上がり
をみせ、やたらと楽しかったことを記憶している。

おそらくこのことと深い関係があると思うが、湯浅先生
と一緒に飲むお酒は、いつも美味しい。どちらかというと、
先生は、酒の場を盛り上げようとするタイプではない。酒
席で何かを積極的になさるということではないのだが、湯
浅先生と飲むお酒は、不思議といつも、「前向きな味」が
する。――仕事をしていれば、様々な制約により、どう
にもならないことも多い。しかし、皆で、智慧をあわせて
考えてみれば、面白い選択肢がないでもない――自ずと
そんな気分させる妙な酒なのである。

そんな魅力を持った湯浅先生のが、教員も、職員も、
学生も、皆、大好きで、知らず知らずのうちに、ついつい
頼りにしてしまう。しかし、もしかすると、我々は、何か
大きなものを、ずっと湯浅先生に背負わせ続けてしまっ
ているのではないか。それを湯浅先生は、笑顔で受け止めて
くださっているけれども、その笑顔は、本来であれば譲れ
ない、何か先生の大切なものと引き換えにしたものではな
いか。そのような不安がちらと頭をよぎらないではない。
「期待」は時として善意を搾取する鎖にもなることを、社
会人であれば、皆、知っているからである。

とはいえ、忖度は無粋。仕事の流れに身を任せて楽しむ

のが、湯浅流であろう。

湯浅先生とこれまでお仕事を一緒にできて、我々は、本
当に幸せであった。とても楽しかった。今、改めてしみじ
みと思う。この場を借りて、先生に、国文学科一同、
心より深く御礼を申し上げます。

湯浅先生、お体にはお気を付けて。そして、今後と
も、どうかよろしくお願い申し上げます。

(ふくしま たけのぶ・実践女子大学教授)